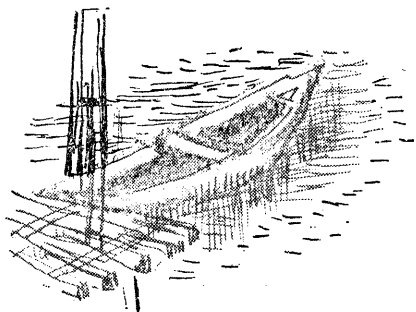


## 私の保育



中谷喜久子

### U君のこと

幼稚園の恒例行事バザーの日だった。子どもたちや小学生、父兄やお客の出入りで混乱している玄関で私は下足の整理をしていた。「先生、先生」と呼ばれる声に顔をあげると、目の前に高校生らしい男の子が立っている。「まあ、U君」少しひげののびている顔に十年前の幼い顔が重なって、一瞬あたりのざわめきが遠のいていた。

市内にある身体障害児施設で生活をし、その後一年保育で入園したU君。ユルセットで固定した足に松葉杖だったのに、しばらくすると松葉杖は不要になって……足の不自由なことには少しもこだわらず、すもうをとったり、ゆうぎの輪の中にも入ったあのUちゃんが。

今はギタークラブに属していて、休みに友人と北海道旅行をして楽しかったし、自信がついたこと、受験のためにもう遊んではいけないことを話す高校生になっていた。

「ずい分立派になって。よく見るとようちえんの頃の面影がうかんでくるけれど、道でお会いしても知らないで通り過ぎてしまっそうよ」

「でも、ぼく背がひくくでしょっ」

「そうかしら。(話しをしていて彼が背が高いとか低いとかは考えていなかったの、少しまごついた) 平均に比べたらそれはどうかわからない。でも他人にどのように見えるかではなく、自分がどのように生きるか、でしょう。これは私にも言うことばですけどね」

「第一希望に受かるようにがんばってね」

T シャツにGパンの彼は、少し離れて待っていた友人からギターケースを受け取ると、一緒に門を出て行った。その後姿にたんぽぽ組の頃のUの素直さでそのまま大きくなり、それに穏やかさと快活さと、たくましさの加わった一人の若者を見ていたことだった。

わずか数分のとりとめのない会話であったが、私の知らない、全く手の届かないところで、こんなに立派に成長していたという感動と同時に、十年の歳月の中で彼が歩んでいる小学生、中学生、高校生の道と、恋愛、結婚、出産、育児の事柄を経て来ている私の歩んでいる道の異なっていることもしみじみ感じていた。

その私に「せんせい」と呼びかけてくれたうれしさと戸惑い、「ぽく背がひくいでしょう」と唐突とも思われたことばの重み、U君には真正面から受けて立って生きてほしいと願いながらも何と思いやりのない返事をしたのだらうと、もどかしさや申しわけのな

さで一杯になり、「保育をした」とか「保育をうけた」とかで表現されるかつての出会いは今、それぞれお互いの歩みの中で、どのような意味を持つのだらうと思わずにはいられなかった。

指導目標云々、年間カリキュラム云々、その達成のために幼児の活動は何々で、留意点は何で、と耳にもするし口にもする。また何々のために何々をすると言わなければ保育者として落着かなような気にもなったりしていた。しかし、このようなわく組以外の想像もできないところで成長しているU君に会って以来しごく当然のことであるが、子どもには自身に育つ力が充分に与えられていて日々に成長していることを改めて思うのである。また幼児期に保育をうけたと言っても、その子どもにとっては、人生のほんとうに短いひとときのことであって、その短いひとときの中で私は子どもたちの育つ力に魅せられ共に生活することによって自分をも育てられているとも思うのである。

\* \* \* \* \*

今私は、自分のまわりにいる子どもたちのことで心が一杯だ。

## M子のこと

二年保育年長児、今まで一日も欠席したことがない。かすかに口に出すあいさつや返事の声以外はほとんど無口、させれば鉄棒

や縄とびなどするが、自分からは何もしない。いつも友だちの遊びを立てて見ている子で、話しかけたりもしないし、そばへも来ない子である。家では大声で話し、手伝いもきちんとするし、かりした姉とのことである。なんとか彼女と接触しようと九月の初めに、おんぶジャンケンをして遊んだ(ジャンケンをし負けた人が勝った人をその指の数だけおんぶする)。クラス中が大喜わぎをして数日遊んだ頃に、M子は母親からの手紙を持って登園した。

「おはようございます。今朝目がさめて布団の中で幼稚園に行かないと言っていました。『昨夜つかまえたコオロギを持っていったら?』と言うとにっこり笑って、行くと言いました。この二、三日はとても張切ってあそんでいます。昨夜も幼稚園から帰るなり外に飛び出して夕方まで元気にあそんでいました。晩ごはんも、小さなお茶わんですが、五はいもおかわりしてハラハラさせました。

『今日はジャンケンに勝てば、おんぶのできるのになあ』と楽しみにしている様子です」(九月十一日原文のまま)

読んだ時からM子に対する安心感のようなものが生まれてきた。クリスマスの用意にと数人の子どもたちが飾りものを作っているテーブルに寄ってきて、「わたしもしたい」「もっとつくりたいの」と耳もとで話すようになった。

## N男のこと

近くの交番と郵便局へ勤労感謝の慰問に行つての帰り道、二列に並んで路地を歩いていた時のことであつた。M男が

「かあさん、あ、まちがった。せんせはらへつたア」

「もうすぐようちえんよ。さつま汁(前日にみんなで野菜をきさんだもの)が待っているからがんばってね」

「おら、せんせいば、かあさんつてよぶかな」

「いいですよ。せんせいもお家へ帰ればおかあさんなのよ」

すかさず後の方からY男が

「おかーさん。エへへ」

ちょっと待つてよ、M男は母親を「ママ」と呼んでいて、おばあさん(確かこの近くのアパートに住んでおられる)のことを、「かあさん」と呼んでいたはずだ。そうすると私はおばあさんのイメージかしら。(十一月二十二日)

## N子のこと

「せんせい、あたし、ころんだの」帰り仕度で、テーブルを片づけている時にN子が言ってきた。「ころんだの?どこでころんだの?」

だの？ いたくなかった？」「そう、だいじょうぶなのね」みんなが帰って、保育室をお掃除しているとき、部屋の隅のストープから引いているコードをガムテープで床に固定しておいたのが、いつのまにか破れていて、誰かがコードに足をひっかけたような跡に気がついた。彼女はここでころんだのだ。そばには移動コップ掛や、手洗台の縁等ころんだ拍子にぶつかる危険なものがあつた。すぐに来て見てあげなければならなかったのに帰す時間に追われてと、改めて言いに来たN子の様子が気になり、保育者としての不注意を恥じた。掃除がすんでからN子に電話をした。「コードにつまずいてころんだところ痛くない？ すぐに見てあげればよかったのにごめんなさいね。新しくテープを貼りましたからもうだいじょうぶよ」

翌朝部屋へ入ってきた彼女はアノラックを着たまま、まっすぐストープの横へ行ってのぞいてにっこりし、それから私の顔をみた。(十二月三日)

\* \* \* \* \*

「あなたの保育は」と問われて「あら」と考えてしまう。子どもたちがうれしいことは私もうれしいこと、子どもが痛いことは私もいたい。子どもたちがおもしろい時は私もおもしろい。——特別なことはなにもしていない、ごく普通の毎日を過している。

“わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるのは、神である。だから植える者も水をそそぐ者も、ともに取るに足りない。大事なものは成長させて下さる神のみである”

(聖書)

一人一人の子どもたちは、保育の心や技術のもっとむこうに、人間の知識や計画をはるかに越えて、絶対な、永遠な存在に向かつて成長していくことを信じる。

私はその成長のために、U君をはじめこの十年の間に、共に生活しては小学校への新しい生活へと見送った子どもたち一人ひとりの人生のほんのつかのまを、「水をかける」というささやかなお手伝いをしてきた、否させていただいたと言えるのではないだろうか。「水をかける」といいながら、その実は一緒に生きたいから、必死になって同じ水を同じ如露で渴いている自分へもたっぷりふりかけている——これが私の保育の姿であり、子どもたちと一緒に居たい理由と言えそうである。

(八戸小中野幼稚園)

